冬の日

常に行き止まりの青色の空の下
あまりに多くの感情を背負いすぎた者に
捨て場もなくて世界は息苦しく
背丈ほどもある草の海は埃色に干からびて
有難いことに僕は再び詩が書ける

自由という名の焦燥が幸福を妬み
寝転ぶのもただ逃げ出したいがため

何からと問われても答えることさえ口惜(くちお)しい

このままここで凍え死んでしまえという思いと
幸福を乗り越えた安穏が欲しいという思いと

果てしない草の海、果てしない風の行方
寒い肩、凍えた手足
全ては冬の澄んだ光の下に温もりもなく
ただ果てしない未来と
行き止まりの生命がふるえてすすり泣く

(1984.12.23)